

2000年の本。帯に「病気、盗難、ボッタクリ…抱腹絶倒体験22話」と書いている。読むほうは気楽だが。。。

「標高 5,500 メートル、チベット高原で凍死？」

文：室橋裕和

・・・

バスはそれでもどうにか進んでいたが、第二の開所・崑崙山脈へ至る登り道になってからは、エンジンが咳き込むようになった。ちょっとした坂道になると、歩いた方が早いのでは、というくらいスピードが出なくなってしまう。そんなノロノロだろうと標高は上がっていくから、私の高山病はまたひどくなっていった。

そうした苦痛に耐えていた深夜1時のことだ。工事途中のまま放置されていて、通行できなくなっている道路に出くわした。バスは仕方なく、迂回するために道を外れて雪解け水でぬかるんだ泥濘の中に突入した。

揺れる。横倒しになりそうなほど、バスは前後左右上下にガッコンガッコン揺れる。あまりの揺れに私の隣でイビキをかいていた中国人が驚いて目を覚ます。

トラックの残骸の脇を通過し、あと少しで道路に戻れる、という所で、ひときわ大きな震動が起こり、同時にバスは完全にストップしてしまった。エンジンをかけなおし、アクセルをふかすが、タイヤは空回りするばかり。

(えっ？ ス、スタック？ 違うよね、すぐ動くよね……)

すると、運転席から中国系の運転手が顔を出し、乗客に向かって何事かを叫ぶと、乗客の男衆はいっせいに息巻いて外に飛び出していくではないか。残っているのは女子供だけなので、痛む頭を抱えて私も仕方なく彼らに続く。泥水の中に降り立ちバスを見れば前後左右、すべてのタイヤが半分ばかり泥に飲まれている。これでは動けない。

男たちはテキパキと作業を始めた。タイヤのまわりの泥を素手でかき出し、そこに石を敷き詰めていく。「さすがに手馴れたもんだ」と思って、私はその作業を遠巻きに見つめていた。協力する元気なんか、私にはもうとっくになかった。

脱出準備完了の旨を誰かが運転手に告げる。30人ほどの男たち全員が、バスの後部に取りつき、アクセルと同時にバスを押す。だが、動かない。エンジン音だけが闇夜に吸い込まれていく。脱出できない……？

悪いことは重なるもので、髪の毛に降りかかる感触に、暗黒の空を見上げると、もう6月だというのに雪がチラチラと降ってきた。それはアッという間に激しくなり、風が巻き起こり、信じがたいことに**吹雪**と化した。

寒暖計を見ると、**気温は氷点下10度**を指している。体感温度はさらに低いだろう。**高度は4800メートル**で、高山病のため頭がギリギリ痛み、喉が裂けそうなほど頻繁に咳き込んでしまう。

泥水に浸かった両足の感覚がなくなっていく。寒いというより、痛い。全身が痛くて冷たい。私は歯の根を異常なほどガチガチ鳴らして、カカシのように突っ立っていた。こんな寒さは、初めての経験である。

カカシ以外の男たちは、荒れ狂う吹雪にもめげず、またバスと格闘を始める。

泥を全身に浴びながら、タイヤ周辺をさらに掘り進め、石や木切れをすきまなく敷いていく。しかし男たちがバスを押し、運転手がアクセルを目一杯ふかしても、タイヤは空回りを繰り返すだけだ。数人のチベット人が、どこから見つけてきたのか、大きな杭のような木でもって、テコの原理でタイヤを押し出そうという作戦を展開するが、これも失敗に終わる。

2時間近くが経過してもなお状況は変わらず、運転手はついに運転席を降り、いっこうに動かないタイヤを不安な顔で見下ろす。このルートのプロであろう運転手が、苦悩の表情を浮かべているのだ。それを見てビビってしまった私は、

(頼むから、そんな頼りない顔はしないでくれよ～)

と、完全に泣きが入ってしまった。助けを呼びに行こうかとも思うが、**通行する車も人家もなく、手の打ちようがない。**

このままチベット高原のわけのわからない峠で凍死する自分が思い浮かぶ。叩きつけてくる吹雪にまかれる私の頭の中で、

(ちょっとシャレにならないよ、これ。……やっぱり飛行機にすればよかった)

という後悔の念が頭の中をグルグルと回った。

でも弱気なのは私だけで、男たちはどうやら新たな脱出作戦を開始するようである。さきほどの杭と大きな石をテコにしてバスをわずかばかり浮かし、その間にタイヤの真下にある泥を取り除き石を敷く、というものだ。

左前輪、左後輪と、男たちはひとつずつ、タイヤに摩擦力を与えていく。吹雪のために視界が悪く、下手すれば腕が潰されてしまうだろうに、彼らは黙々と雪や泥と格闘しているのだ。歯を食いしばってバスを持ち上げている寝癖頭の青年たち。泥を両手でかき出しているヒゲのオヤジは、この寒さなのにとときどき汗を拭いている。皆、必死なのだ。

それほどにまずい状況なのだが、ビビりと寒さと頭痛のために、私はカカシ状態のまま彼らの奮闘をボンヤリ眺めていただけだった。すみません……。

30分後に無事作業が終わり、運転手が泥だらけのまま運転席に飛び乗った。男たちは雪と泥の白黒顔のまま、バスの後部に集合した。私は今更ながら、

(何やってんだ、俺……自分が乗るバスなんだぞ)

という思いにかられていた。このままボンヤリ流れに任せているのはあまりに情けない。ひとりだけ他人ズラしていいわけではない。手伝うんだ。

ばちん、と私は自分の頬桁(ほおげた)にビンタをくれて、男たちに混じってバスの後ろについた。隣り合ったオヤジはニヤリと笑った。

エンジンスタート。アクセル一杯。

「イー、アル、サン！」

その掛け声と同時に、私も力を込めてバスを押しした。しかし、動かない。もう一度。

「イー、アル、サン！！」

全員で身体をバスに預けるように押しした。私も雪と鼻水と泥で顔面をドロドロにしながら、男たちと同じように腰を落として押し続ける。動け、動け……。

次の瞬間、つかい棒が取れたように、私の身体はスッと宙を泳いだ。2～3歩よろめき私は顔を上げた。バスは男たちの敷き詰めた石や木片をしっかりと踏みしめ、エンジン青も高らかについに走り出したのだった。

「オオオオオオ！」

男たちの歓書の叫びが、深夜のチベットに響く。運転手はクラクションを轟かせながら、道路までいっきに走り抜けようと、バスのスピードを上げる。脱出の喜びと安堵からか、男たちは満面の笑顔で歓声を上げながら、バスの後を踊るように走る。

私はその最後方でへろへろになって立ちつくし、道路に戻ったバスを見つめていた。

(やった、動いた。よかった……)

バスの中では、乗客たちが晴れやかな顔をして、握手を交わし合っていた。そして自然に拍手が沸き起こった。喜びの輪の中に私も入れてもらって、隣から回ってきたタオルで顔と手を拭った。そしてバスはようやくゴルムドに向けて爆走を開始した。

頭痛や寒さ、それとスタックを脱出した興奮で眠れなかった私だが、やはり身体がまいっていたようで、いつしか眠りに落ちていった。

翌朝、目が覚めると頭痛が消えていた。バスは高山地帯を抜けた後だった。レンガ作りの簡素なドライブイン兼民家で停車し、休憩となった。麺をすすった後、私は一直線に続く道路の真ん中に立った。そしてはるか崑崙をのぞみ、タバコを一服……。

うまい。これほどうまいタバコも久しぶりのことだ。そして私はひとりつぶやく。
(突破したぜ……勲章がまたひとつ、増えちゃったな)

ほんの数時間前には泣きそうな顔で震えていたはずだが、なんだかすっかり気分がよくなって、自己陶酔モードも復活である。やっぱりバックパッカーはこうでなくては。

ドライブインを発車してすぐ、景色は一転して360度砂漠と化した。チベット高原を抜けたのだ。その後、一面に砂礫と塩田が広がる世界を走ること2時間、ついに、ついにバスはゴルムドに到着した。「たどり着いた……」という表現の意味がわかった気がした。ラサからじつに32時間のオン・ザ・ロードだった。